Their weapons
成人向け
FOR ADULT

Their weapons

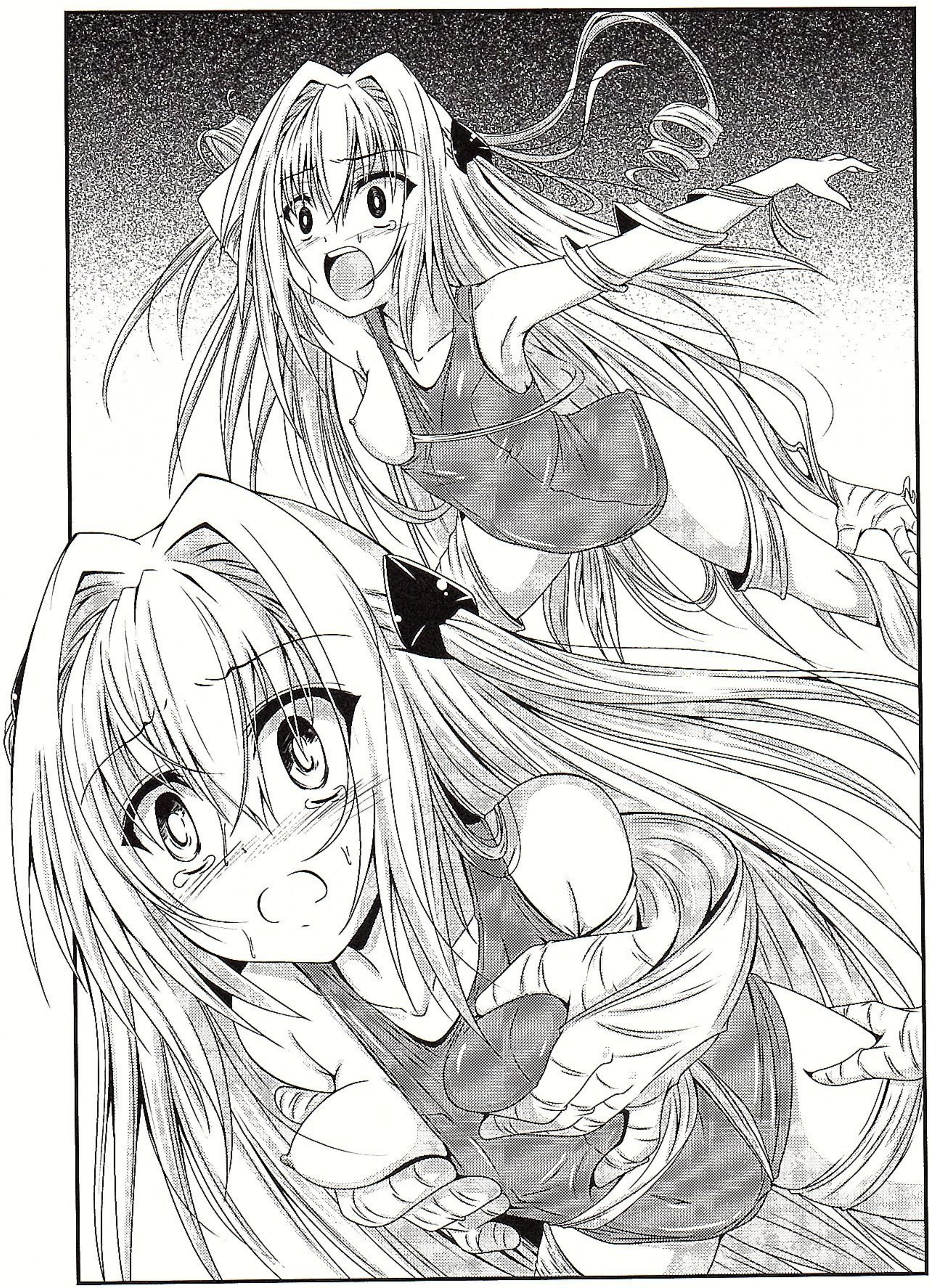
挿絵　ふみひろ
文　三等兵

暑さも本格的になってきた青い空の下。
彩南高校のプールでは、スクール水着を着た女生徒達の声が蝉の鳴き声に負けじと賑やかに響きわたっていた。
「わーっ！　ティアーユ先生大胆ーっ!!」
「こ、これはミカドが――」
「あ、あたしって……あたしって……」
「どんまいよナナ」
それぞれの悲喜こもごもの、それでもどこかあっけらかんとした明るい声がプールサイドのそこかしこから上がっている。
そんな様子をプールサイドに腰掛け、足先だけを水面に浸して金色の闇ことヤミが他の皆と同じようにスクール水着に包み、
「……」
少々控えめな胸を収めた紺色の水着から伸びる、形よく伸びた足がちゃぷりと、プールの水面を揺らしていた。
特になにかを意識して深く思うこともなく、ヤミにとって今や日常となったその風景を眺めていると、
「あはは」
と、笑い声とともに影がさした。
赤毛の三つ編み。自分と同じ変身兵器であり、そして妹に当たる黒咲芽亜ことメア。
「まーたケンカしてるねあの二人」
ギャーギャーと言い合うナナとモモを見ながらそう言うと、彼女らしい屈託のない笑みを浮かべて隣りに座った。
何気ない言葉だった。
けれど、その言葉はメアの姉という自分の立場を思い出させる、というよりは再確認させられる。
「地球には『ケンカするほど仲が良い』という言葉があります」
「へーっ、さすがヤミお姉ちゃん。物知り～」
他人から見れば他愛のない会話。
「けど、それで言うとあんまケンカしないわたし達って仲悪い？」
「そうとも限らないでしょう」
「だよねーっ。あはは」
自分に妹がいると知って、
「――私達は姉妹になったばかり」
その自分と同じ兵器であったメアがこの星にきて、この彩南にきて、やはり自分と同じように受け入れられていく姿を見て、
「理解……いえ、再確認できた」
脳裏にここ――彩南に来てからのことが思い浮かぶ。
隙あらば後ろから人の胸を揉んでくる人懐っこいクラスメイト。
自分を友達だと言い切ってくれた結城美柑――いえ、美柑。
物理法則を無視した、ある意味特異能力とさえ言えるコケ方をする結城リト。
リトのことを思うと、多少イラッとする気持ちがわくが、それでも変身兵器である自分を忌避するどころか――受け入れてくれた。
そう思い返すと身体の――胸の奥に暖かいものを感じる。
以前までの自分なら戸惑っていた。だけど今は自然に、そう、受け入れられる。
ふっと、自分の頬が緩むのを感じる。
でも違和感も戸惑いもない。
「私達はここにいてもいいのだと」
ごく自然に口から出た言葉に、
「……ん」
メアがにっこりと笑って同意を示すように頷く。

それを見ると、ココロの中が静かな、ゆったりとしたもので満たされていくのを感じる。
温かい、穏やかな、気持ちになっていくその時――
「――えっ!?」

ざわと、髪の毛がいきなり膨れ上がった。それぞれが大きな手の形になって意思を持った生物のようにヤミの身体を這いまわる。
臀部の部分をまくり上げるように揉みしだき、スクール水着をハイレグのように食い込ませ、脇の下から水着に収められていた乳房を握りしめるように引きずり出す。
なっ、なにこれ……変身?
「あっ! く、うぅ……っ」
体のいたるとこに巻き付いて拘束して自由を奪っていく。
制御……できない!?
動けなくなった自分の体の、それも秘めたる部分の柔らかさを確かめるように、大きな手となった髪の毛が蠢いて襲いかかる。
身体が……熱い……。ど、どうしてこんな、いきなり?
羞恥と刺激で頭が混乱する。
頭をプールサイドのコンクリートに押し付けるようにして耐えようとすれば、今度は突き上げるような姿勢になったお尻や、水着からこぼれて桜色の突起があらわになった可愛らしい乳房へ、髪の手が我先にと群がっていく。
「は……っ、あ、んっ、んぅ……っ!」
お尻を覆う水着の中へ潜り込んだ髪の手の指先が、可愛らしくすぼまった菊の蕾の皺をグリグリと押しつぶす。別の髪の手は引き絞られてハイレグ状態になった水着の下で、秘裂の谷をグニッと横に引き伸ばしていく。
「はぁぁ……っ!」
そのたびに沸き起こる甘い痺れに身体が震えていく。
いつも手足のように使えた変身能力が今はまるで他人のように別物に感じる。
むき出しになった右の小ぶりな乳房が髪の手でぎゅうぅっと握られ、潰されたように形を変え、桜色の突起がツンと上を向いて尖る。
それほど強く握られているのに、痛みを感じるどころか――
「ん、く、ふぁ……っ」
口からは艶っぽさを帯びた甘やかな呻きが漏れていく。
じっとりとした汗が浮かび、体の奥から熱くなっていく。
「こ……、これは……」
なにが起きているの? 私の身体に……っ!?
思考をまとめようとしても、身体の敏感なところを攻め続ける髪の手の前に抵抗する力が奪われていく。
「は……は……ぁ」
こ、声が……このままじゃ……が、我慢、できなく――
もぞ、と、無意識に太ももが動く。それは髪の手から逃れるためではなく、むしろ貪ろうとした動きだった。
「くぅ……っ!」
顔を羞恥で赤く染めながらも、歯を食いしばって快楽に溺れようとする身体に逆らって顔を上げる。すると、視界に赤く揺れる三つ編みが目に入った。
妹であるメアの赤毛の三つ編み。
それが、毛先から徐々に黒く変色していく。染まっていくのではなく、侵食していくような変化。
「ずっと考えていた……――」
先ほどまでとは打って変わった口調に、思わず見上げてみれば、そこには漆黒の髪の毛になったメアが見下ろしていた。

――金色の瞳で。
「……メア……!?」
いや……、これは、でも、あの口調、あの瞳……なによりもあのまとっている雰囲気は、まるで――
「ネメ……シス……!?」
思わず口にして混乱が深まる。
なぜ？　どうして？　さっきまでは間違いなくメアだった。なのに――
「くっ……きゃっ!?　あ、あぁ、そんな……」
反射的に起こそうとした身体を、髪の毛がギチギチと音を立てて絡みつく。
そして髪の手が両足を掴むと、水着にじっとりと汗とは違うシミを作り始めた秘裂の部分をさらけ出すように大きく開かせた。
「うぅぅ……」
閉じようにも自分の一部分であるはずの変身能力が制御できない。どころか――
熱い……身体の、奥が……。
なだらかなボディラインの、おへそより下の内側。
ずくんずくんと、もう一つの心臓のように妖しく熱を持って蠢くのを感じる。
いつの間にか呼吸が荒くなっている。
「――そんなプログラムがイヴに植えつけられていたっていうの!?」
ティア……。
靄がかかったようにはっきりしない頭に、ティアの切羽詰まった声が聴こえる。
「――そう……、ダークネスとは――」
それに答えるのは一人、落ち着き払った態度の――ネメシス。
変身の暴走。リミッター解放状態。対惑星兵器。時限爆弾。
滔々と今自分の身に起きていることを説明している。
そして――
「メア……なんのギャグだ!?」
「ちがうわナナ……――」
ナナやモモの声に答えるようにネメシスがさらなる変化をし始めた。
髪の色や瞳の色は違っても、それでも気配や顔、身体は間違いなくメアだったものから、
さっきまでは間違いなくメアだった……はずなのに……。
身長が下がり、三つ編みはふわりと長い黒髪に変わり、肌は褐色へと変化していく。なによりも――
明らかに……気配が変わった……!!
白いスクール水着に衣替えした褐色の少女。それは姿も気配も花火大会にあった時と同じもの。
どういう、ことなの？
わからない。
今自分に何が起きている事も。
今眼の前で起きている事も。
そして、メアに何があったのかも。
「――メアさんに化けてどういう事なのネメシス!!」
「おお怖い。ちょっと茶目っ気を――」
モモとネメシスのやりとりが、ただ耳を通り過ぎて行く。
ちがう、そうじゃなくて――
「――じゃあ……本物のメアは？」
不意に一番聞きたかった言葉が、耳に飛び込んできた。
身体の熱気に浮かされながらも目を向ければ、ナナがネメシスと対峙して問いただしていた。



そう。今は私よりも何よりも一番聞きたいのは妹――メアのこと。
だが、ネメシスはその猫にも似た金の瞳を歪ませ、
「……すまんなナナ姫。そして金色の闇」
酷薄さをにじませた笑みを浮かべると、
「メアなど初めから存在しない」
ハッキリと、そう告げた。
その言葉を理解するのに一拍かかった。
見えているはずの視界が、ネメシスが、周りの音が、声が、全て遠ざかっていく。
脳裏によぎるのは今日までのメアの顔。
それが、闇に飲み込まれるように消えていく。
……え？　いな、い……？
「メアとは私が作り出した擬似人格――」
……それ、は、初めから？
今までのことが？
妹。そう言った。
ぎちり、と胸の奥がきしむ。
どくどくと脈打つ鼓動がうるさい。体が震えている。息が苦しい。
「そん、な……」
何かが崩れる。自分の中で、さっきまで確かにあった何かが。
熱い。
身体の奥から、抑えていた何かが溢れてくる。
さっきまでかろうじて抑えられていた心の蓋が、ネメシスの言葉によって引き剥がされていく。
熱い熱い熱い熱いあついあついアツイアツイあツいアつイ!!
ざわざわざわざわ
金の髪の毛が激しく波打ち、獲物に喰らいかかるように身体を疾走った。
いくつもの髪の先が勝手に変身能力で小さな刃に変わり、水着を切り裂いていく。
充血して尖りきった乳頭の控えめな胸がふるりと震えあらわになり、翳りのないつるりとした恥丘の下の秘裂をさらけ出した。
まだ汚されていないきれいに閉じられた割れ目から、つうっと、わずかに白く濁った一筋のしずくがお尻の菊の蕾へと流れていく。
「あっ、あっあぁ、あぁぁあぁっ!!」
うっすらと赤く染まった白い肌に珠のような汗が浮かぶ。
内側からあふれる何かに沈み込むように取り込まれていく。
「ヤミちゃん！　心を落ち着けて!!」
なにか聞こえたような気がする。
それを思い出す前に、自分の髪の毛が作った繭の中へ取り込まれていった。

「う……こ、ここ、は……？」
千切れた――もう水着ではなく、ただの切れ端と化した――水着を汗で身体に張り付かせたままのヤミがあたりを見渡す。
白い。
特に照明も何も見当たらないのに上も下も真っ白だった。
そんなよくわからない場所にほぼ全裸に近い格好でお尻を少し突き上げるような形でうずくまっていた。
熱を持った頭であたりを見回す。何も見えず、何も聞こえない。
ただ、心の中に押しとどめようのない不安だけがざわめいている。
……何か、何かあったはず。
それだけは覚えている。しかしそれが何なのか思い出せない。
焦りばかり募っていく。浮いているのか沈んでいるのかわからないまま顔を上げた、その時――
「ほう。発動せずか。まだ足りなかったようだな」
――この声は……っ!?
「ネメシス!!」
あたりを見渡す。
どこ？　あの声の感じだとすぐ近くに――
「そう慌てるな」
後ろ!?　いつの間に!?
驚愕しながらも、戦い慣れた身体は素早く振り向いた。
漆黒の髪に褐色の肌。白いスクール水着で腕を組んだ姿のネメシスが傲然とした態度で立っている。
思考するよりも速く変身を展開させようとして、
――え!?
身体になんの変化も起きないことに気づいた。
「ど、どうして……？」
「ククク、まだ染まりきっていないといべきか、それとも堕ちていないというべきか」
「何を――っ!?」
言っているのだと、真意を問いただそうとした言葉が断ち切られた。
ざわと、生き物のように金の髪の毛が蠢き、変身能力が発動した。
だがそれは目の前のネメシスに向かうことはなく、
「なっ!?」
ヤミのあられもない格好の身体に襲いかかり、手を後ろ手に縛り上げ、膝を曲げたまま足を開かせてMの字にして宙吊りにする。
「く……っ、あっ、ふあぁっ！」
そして完全に拘束され、身動きの取れなくなった身体の上を、うねうねと触手のように這いずると、汗ばみ、小さく震えていた可愛らしい乳房を絞り上げるようにきゅううっと、巻き付いた。途端――
「んんんんんぅっ!!」
ビリッと、電撃のような甘い痺れに思わず声を上げてしまう。
「なるほど。つまりはそれが最後の鍵か」
目の前でネメシスが腕を組んだまま実に楽しそうに言う。その声で見られていたことを思い出し、かあっと、羞恥で頬が熱くなるのを感じた。
「わ、私をどうするつもりですか！　こんな……こんなえっちぃことを……くっ」
なけなしの理性を総動員させ――それでも、少し気を抜けば快楽に溺れそうになってしまうが――熱く荒い息を吐きながらネメシスを睨みつける。
だが、ネメシスはそんなことも見透かしているとでも言うような

態度で皮肉げな笑みを崩さず、
「私は何もしていない。ただ見届けに来ただけだ」
「……!? で、では、この変身能力の暴走は……」
「あーはっはっはっ!」
その言葉にネメシスは高笑いを上げ、
「言っただろう? ここはお前の、そうだな言ってみればお前の頭の中だ。つまりな、今のお前のその状態はお前自身が望んでいることだ」
ネメシスの言葉に絶句する。
私が望んだ……!?
「そ、そんなこと――」
「思いだせ」
否定しようとした言葉にかぶせるようにネメシスの声が響く。
「先ほどまでのことを! 今お前はプールサイドで生まれ変わろうとしているのだ。ダークネスとしてな」
「ダ、ダークネス……?」
チリッと、脳裏に何かが浮かび上がる。得体のしれない、黒い、何かが。
「フフ……いい格好じゃないか」
いつの間にか前に回り込んだネメシスが、開かれた足の間を覗き込みながらそういった。
大きく開かれた両股の付け根。無毛の丘の下の秘裂から汗とは違う粘液がとろーりと、銀の糸を引いて垂れ落ちていく。
「はぁ……っ!」
そんな僅かな刺激にさえ、白い臀部を震わせ身悶えするほど過敏になっていた。
「我慢することはないだろう。さあ、思うままにするといい」
そのネメシスの言葉に呼応して髪の毛がぞわぞわと蠢く。
身体のあちこちで何本もの髪の毛が束なって重なり、指ほどの太さに変わると、柔らかな白い肌の敏感な部分を求めて動き始めた。
「ふわぁっ!?」
否定の言葉を打ち消すように、こらえきれない喘ぎ声が上がる。
触手となった髪の毛は獲物を見つけた飢えた獣の如く、汗ばんで敏感になった身体を責め始めていた。
むき出しになった少女らしい膨らみの両の乳房にぐるりと、絞るように巻きつく。
ピンと張り詰めて尖っていた、充血して桜色よりもほんのり赤く染まって震える頂点の突起へ、髪の毛の先端が分かれ、吸い付くように喰らいついていた。
過敏になった神経全てを、蠢く髪の毛がざわざわと締め付ける。
その瞬間、胸の先から電気を流されるように沸き起こる快感に身を悶えさせた。
「あっ! あああっ、はぁ……っ!!」
ついにこらえきれなくなった甘い声が白い空間に響く。
汗が珠となって赤みがさして震える肌を滑り落ちていく。
そして髪の毛の触手が今度は手の形に変わり、すぐさま上を向いている乳首の先をぎゅうううううっと、押しつぶすように捻り上げる。
「んくうううぅぅぅっ!!」
身体全体を震わせ白い喉を見せて仰け反ってしまう。
声を上げて揺れる身体に合わせるように、ぽた、ぽた、と、秘裂から臀部の先端へと、半透明の滴が絶え間なく流れていく。
「おお、溢れてきているじゃないか。まるで粗相をしたようだな」
その様子を実に楽しそうに眺めていたネメシスが、
「ハハハ、胸だけじゃ駄目だろう? 下のほうが寂しそうにしているじゃないか。時間はいくらでもある。中と外は違うからな」

煽るように言った言葉に髪の毛たちが反応する。
ざわと、束となって膨れ上がり、幾つもの髪の手ができていく。
そしてそれらの手が下半身へと、自分でもわかっているくらい強く、ずくんずくんと熱を持っている秘裂へと伸びていくのがわかる。
「あ、ダ、ダメです！　そ、そこは……ひぅっ!?」
そんなお願いなど暴走している髪の手が聞くわけもなく、躊躇なく濡れそぼった秘裂に手をかけると、グイと押し開いた。くちゅっとした水音がして、溜まっていた愛液が一際大きな滴となってぽたりと、落ちていった。
「ずいぶんと我慢するんだな。水浸しになってしまっているではないか」
ネメシスがわざとらしく声を上げ、顎に右手の指を添えながらじっくりと、開かれた恥部を観察し始める。
ぬらぬらと光る綺麗なピンク色の媚肉、その中で皮を被ったまま小さく震える肉芽、その下の尿道はきゅっと怯えるようにすぼまり、更に下の膣口は奥から半透明の粘液を溢れさせながら、ヒク……ヒク……と物欲しげに収縮を繰り返している。
み、見られているっ!!
そう意識すると、視線が物理的に感じられるように錯覚してきてしまう。きゅうっと、秘裂の奥に勝手に力が入る。じんじんと痺れる感覚と羞恥で顔が熱い。
「く……っ」
ネメシスに見られている光景を直視できず、真っ赤な顔をうつむかせ、下唇を噛んで、ただ身体を震わすことしかできなかった。
だけどそれも――これ以上刺激がなければの話だった。
ぐちゅっと、髪の手の親指に当たる太い指が、膣口に指の腹をグリグリと押し付けた。
「あぐぅっ!?」
腰を震わせ、思わず苦鳴に近い声と共に顔を上げた。
力任せの、愛撫とはとても言えないいきなりの刺激に、汗が吹き出して止まらない。
「こ、こんな……ぐぅぅっ!!　がっ!!　ぁあ……っ!!」
ぐちゅっ、ぐちゅっ、と叩きつける水音が響くたびに、押し出されるように口から声が漏れてしまう。
「フフフ、なかなかに手荒いな。そうではないだろう？　金色の闇よ」
つ、とネメシスが瞬間移動のように吊り下げられている背後に回りこみ、汗ばむ肩へ褐色の手を添えると、
「最初は優しく、だ。ゆっくりと、ほぐすように、な……」
諭すように囁いてきた。すると――
「う、あ……？」
さっきまでの叩きつけるようだった髪の手の動きが変わった。
「そうだ。指を濡らして少しずつ……、そうだ」
ちゅく、ちゅく、と膣口の周りを優しく撫でるように動いていく。
「んぅ……くぅ……あ、あぁ……っ」
もう声が抑えられない。
身を捩り、熱い吐息を漏らし続ける。
秘部から沸き起こる快感に意識を奪われていく。
「手は出さん。が、アドバイスくらいは構わんだろう。ククク……」
すぐそばのネメシスの愉しそうな声。だが、それに返答をするような余裕はない。
ちゅ、ちゅく、くちゅ、と、髪の手が膣口をねっとりと、こねるようにかき回すたびに――
「んっ、ぁ、は、はあぁ……」
眉根を寄せて噛み締めた唇から、艶を帯びた熱っぽい喘ぎがこぼれていく。

子宮の奥が切なく疼き、もどかしささえ覚えてきている。だが、片隅に残った理性のかけらを奮い起こし、それらを否定していく。
こ、こんな、えっちぃこと、は、私は――
そうしなければ、自分がどうなってしまうかわからないから。
髪の手に嬲られる胸と秘所の快感にグラグラと揺れる思考の中、抗う。
だが――再びネメシスの囁く声が耳に入る。
「さあ、次はどうしたい？　金色の闇。まだ足りないのだろう？　快楽はまだまだ先があるぞ……お前の思うままだ」
手が動けば閉じてしまいたいほどの甘い誘惑に満ちた言葉。
望めばこの疼きが、さらなる快楽になると、
「そ、そんなこと、私は、求めて、いない」
かろうじて否定するが、その声は自分でもわかるくらい弱々しく、虚しさに満ちていた。
そして、
「そうか？　そろそろ欲しくなってきたんじゃないか？　ずいぶんと悩ましげに腰が動いているぞ？　何がいい？　やはり……結城リトか？」
ネメシスの口から出た名前が、全てを決めてしまった。
結城リト。
脳裏にあの男との様々な関わりがよぎっていく。
「は……あ……」
身体が更に熱くなっていく。胸が苦しく、呼吸もままならない。
鼓動がうるさい。
熱い。
熱く疼いている。
不意に――髪の手の動きが止まった。
「はぁ……はぁ……？」
た、助かった？
そう思った途端、だらりと、ぶら下がるように体中の力が抜けた。
目を閉じ、呼吸を整えるのに集中する。
一瞬、変身能力の暴走が収まったのかと、そう思ったのだが――
「……ほほう。これはこれは♪」
嬉しそうなネメシスの声に不吉な予感を覚え、閉じていた目を開けてみればそこに、
「な……！？」
しゅるしゅると、髪の手が解け、別の何かの形を作っていた。
丸みを帯びた先端、そこから下部に向かって一度膨らみきり、段差をつけてくびれて、少し弓なりにそそり立っていく。
紡がれていくソレは、逞しい、男性器そのものだった。
それも、その形には見覚えが――ある。
「なるほど。なるほどなるほど。確かに指や手ではなくこれではないとなあ？」
直接見なくてもネメシスのニヤニヤと笑う顔がわかる。
これ、は……結城リト、の……っ！
つい先日もドクター・ミカドの地下室で見たばかりだ。
「うあ……」
と、絶句して息を呑んだあとも目が離せなかった。
知識だけはある。
ソレをドコにどうするのか。
ゴクリと、喉が鳴る音が聞こえた。
「……え？」
その音が自分のものだと気づくまで間があった。
……え？
そして愕然とした。
今――私は何を考えた？

「クックックッ、どうした？　いい機会ではないか。欲しかったのだろう？　結城リトのが」
いつの間にか男性器となった髪の毛の向こうがわに、ネメシスが腕を組んで立っていた。そしてその言葉に反応したかのように、ジリジリと開かれた秘所に向かってにじり寄ってくる。
「ひっ!?」
反射的に足を閉じようとしたが、巻き付いている髪の毛はびくともしない。
無駄とわかっていても、それでも抵抗し続けた。
「くっ、こないで……」
そうじゃないと、自分の中から何かが出てきそうな気がして。
「元はといえば自分のものじゃないか。そう嫌うこともないだろ」
クスクスと笑うネメシス。
その笑いがずっと気に障る。
まるで、こちらの中身を全て見透かした上で嘲笑っているように思える。
「い、いくら元が自分の髪とはいえ、見たくもないものは見たくありません」
しかし、やはりそれも見透かすように、気に障る笑みを浮かべたまま――
「ふむ。それもそうか。初めては直視することも怖いものなのかもしれないな。なら見なければいいだろう？　例えば――後ろから、とかな」
「う、後ろ？」
それは、つまり――
脳裏に浮かんだものを理解するよりも速く、身体を拘束していた髪の毛が動く。
「きゃあっ!?」
釣り上げられていた体勢からぐいと、振り回されるようにして白い床面へ組み伏せられた。
肩や、後ろ手に拘束された両腕ごと背中に重圧がかかり、顔を床へうつ伏せに押さえつけられる。
そして両膝をつかされ、菊の蕾や濡れそぼった秘裂がよく見える格好でお尻を上げさせられた。
「……くっ、こ、こんな格好……」
自分がどんな姿勢かすぐ理解出来るだけに余計に恥ずかしい。
無意味だとわかっていても大事な部分を隠そうと足掻いてしまう。
「ほうほう。確かにこれなら見ないですむな。さすが金色の闇」
ネメシスが今度はお尻側に回りこんでしゃがみ、まるでお尻に話しかけるかのように振る舞う。
「それにしてもいきなりこんな体位とは、ずいぶんと大胆だな」
あまりの屈辱にギリと、音が鳴るまで奥歯を噛みしめる。
「……っ！　白々しい！　これは全てあなたの仕組んだことではないですかっ!!　私はこんなえっちぃ事なんて望んだことはありませんっ!!」
「フ、フフフ……、さっきから言っているが、私はここではただの観測者だ。それがお前の本心なのだよ。金色の闇。確かに闖入者ではあるが、私は何もしていない」
ネメシスは同じ主張を繰り返す。だけどそれを認める訳にはいかない。ネメシスが仕組んだことでなくてはいけない。
そうじゃないと、これら全ては私の心が望んだことになってしまう!!
「そ、そんなワケないでしょう！」
身動きの取れない身体。制御できない能力。恥辱と屈辱にまみれた体勢。それでも言わずにはいられない。
「ふーむ。これでは水掛け論というやつだな」

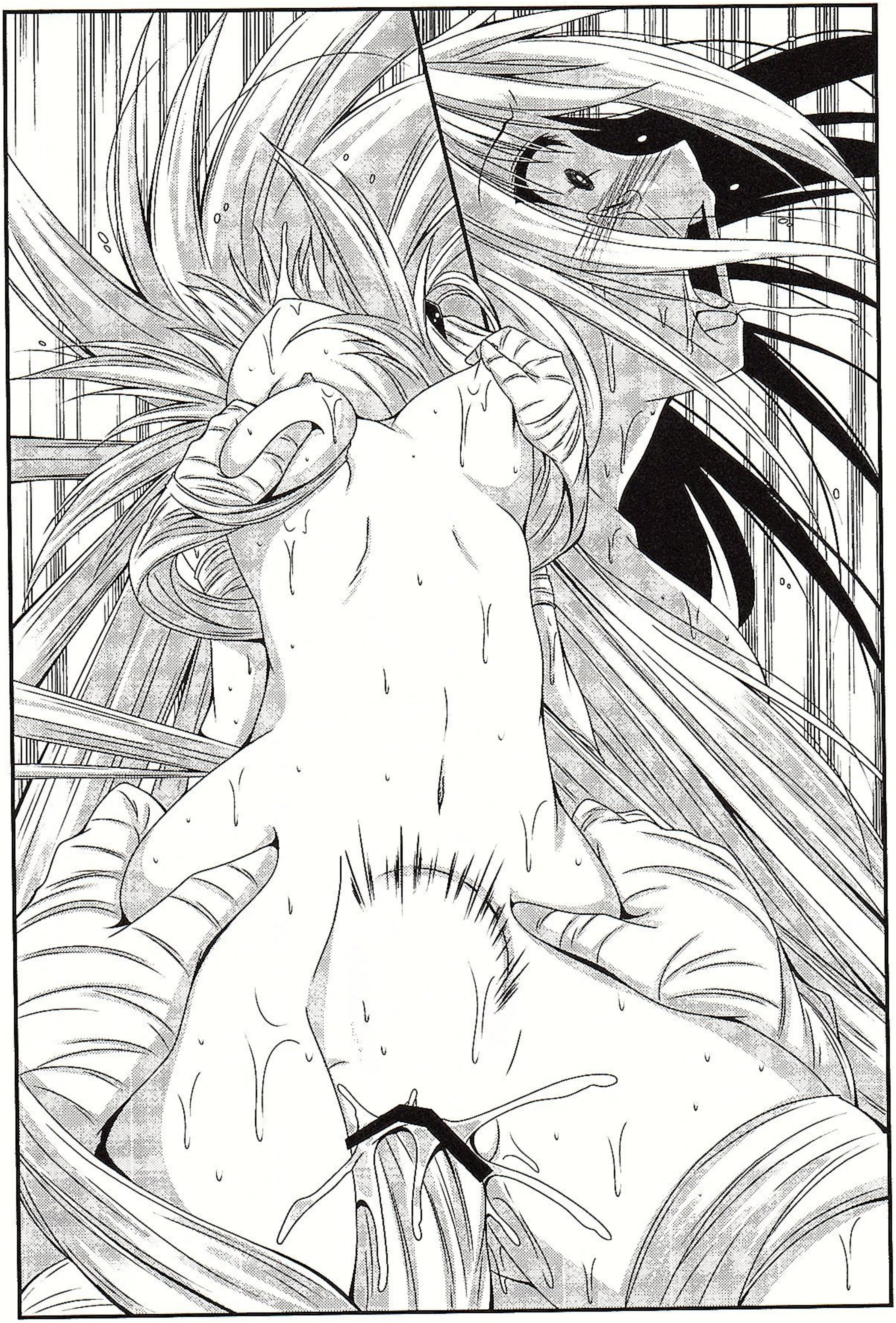
くつくつと、喉を鳴らすような愉しそうなネメシスの声。
そのままの口調で、
「ではこうしよう。あー、なんというのだったかな、こういう時は。……そうそう！」
ネメシスのわざとらしい声と、手を打つ音が聞こえた。
「身体に聞け、というやつか？」
「なっ、何を――っ？！」
すべてを言うよりも速く気配があった。
押さえつけられて晒されている、羞恥で熟れた白桃のようになっているお尻のそばに、そそり立つモノの気配。
「なーんだ。ちゃんとその気じゃないか。それはそうか。これだけ濡れているんだからな」
ほう、とネメシスの吐息がねっとりとした熱い粘液にまみれた秘裂に吹きかけられた。
「はあぁ……っ！」
ただそれだけの刺激でゾクゾクっと背筋が震える。
じわーっと、自分の膣奥から熱い何かが染み出すようにトロ、トロ、と流れだすのがわかる。
ほんのりとピンク色に染まったお尻がもじもじと、悩ましげに揺れ、膣口がきゅっと収縮して、半透明の愛液の流れを断ち切って滴として零していく。
「準備万端だな。少々ちょっかいを掛けてしまったが、ここからは邪魔はしない」
すっと、ネメシスの気配が離れた。そして、代わりに息を吹きかけられただけで悶えるほど敏感になっている秘裂に別の気配が近寄ってくる。
「あ、ま、まって――んくぅっ！！」
先端がくちゅっと、とろとろの膣口に押し当てられると、バチッと火花のような快感が走って目がくらんだ。
こ、こんなの、耐えられない……っ！！
ドクンドクンと心臓が高鳴っていく。
リトのペニスを模った髪の毛はそのままゆっくりと、ヤミの膣口を押し広げて埋没して収まっていく。
「は……んぅ……ぅく……っ」
熱く、愛液でぬらぬらとした肉ヒダが、カリに当たる部分に巻き付いていく。それをじゅ、じゅると、模倣のペニスが押しつぶして進むごとに、うねるような快感が巻き起こりその渦の中に沈み込んでいくような感覚を覚える。
「お、お腹の中が……あぅっ！」
狭い膣道がカリでこじ開けられてサオを飲み込んでいく。電気のような快感の刺激を受けるたびに膣内の肉壁がビクッと蠢いて拒むように模倣ペニスを締め付ける。
するとまた新たな快感が生まれ、間断のない悦楽の連鎖が始まっていく。
やがて、こつんと、膣奥の子宮近くで模倣ペニスの動きが止まった。
「はぁ……はぁ……」
い、一番奥、に……。
届いた、と思った瞬間、
ぞるっと、カリが一気に膣口近くまで引き戻され、目の前が白くなるような肉の刺激が迸る。
「ふあああああああああああああぁぁっっ！！」
それが収まらないうちに再度膣奥へと貫き、また引き戻される。
グチュグチュといった粘っこい水音を立てて、模倣ペニスに押しのけられて白く泡だった滴がぼたぼたとこぼれ落ちていく。
「んくぅっ！　うぁっ！　ひぅ……っ！！」

膣内をかき回すような抽送がヤミの膣内の肉壁を前後に扱き上げ、脳を絶え間なく痺れさせる。
「ふあっ、あっ、あ、ああっ、あ……っ!!」
熱い……。な、中が……。
切れ目のない性感がどんどん積み上げられて、頭はただ快楽の受信機の役目しか用をなさなくなっていく。
模倣のペニスに快楽の刺激を求めて膣内のヒダというヒダ、媚肉という媚肉が貫かれるために肉道を狭めて突き込まれるのを待受ける。
子宮内の空気全てを吸いだすような長いストローク、そして指一本ですらキツイ隙間をぐぐっと、熱く奥から溢れる愛液にまみれながら突き貫き、子宮口にぶつかっていく。
「くううぅぅっ……っ!!」
口の端から涎をうっすらと流しながら、汗にまみれた身体を震わせ、自分の変身能力からの責めを受け止める。
拘束されている腰が、抽送の動きに合わせて艶めかしく揺れている。
ヤミは全く意識していないが、自身で快楽を求め始めていた。
「フーム……これはこれで面白い見世物だが、埒が明かんな。もっと負荷を与えないと」
ネメシスはそう一人つぶやくと、喉を調えるような仕草をして軽く息を吸い込み、
「ヤミおねーちゃん! リト先輩の具合はどーお?」
メアの声で呼びかけた。
「!?」
その声に快感の波濤に沈んでいたヤミの意識が引っ張りだされた。
メア……? これ、は……結城リトの……っ!?
頭の中が一気に混乱する。快楽と不安が入り乱れて記憶の断片が駆け巡る。
そして、思い出す。不慮の事故で見てしまったリトの生々しい一物。
それが今、私の中で――
「あ、ああ……」
そう意識した刹那――快感の質が変わった。
模倣ペニスの動き一つ一つが、細かく、どこをどう刺激していくのかそれが全部伝わってくる。
こ、これが、結城リトの形――
処理しきれないはずの膨大な量の情報が頭を埋め尽くしていく。
「あああっ!! ふわっ!! ダ、ダメッ!!」
き、きちゃう……っ!!
ヤミの身体がビクッビクッと痙攣を繰り返し始める。二、三度小さな波のように繰り返し、
「んんっ――――」
わずかな空白のあと、それは一気にヤミを絶頂へと押し上げようとした、その時――
「――ふぇ!?」
ずるりと、濡れそぼる肉道で暴れ狂っていた模倣ペニスが完全にヤミの膣穴から抜けていた。
押し広げていたモノがなくなり、ふにゃりと膣道が力無く塞がっていく。
「う、あ……」
さっきまで熱で満ち満ちていたモノがなくなり、妙な寂しさを感じる。
ヤミは視線を巡らせて、抜け落ちた模倣ペニスを見た。
抜け出てもなおぬらぬらと光っている。
きゅんと、子宮奥が疼くのを感じた。

さっきまでの肉壁を削るように貫いていく感触が蘇ってくる。
背筋を這い登って身体全体を震えさせた快感を。
思考を真っ白に染め上げた快感を。
それも全て結城リトのアレが――
「どうした？　金色の闇よ」
「――っ!?」
タイミングを図ったかのような言葉に我に返ったヤミが見たものは、すぐそばで自分を見下ろすネメシスだった。
幼さを感じさせる肢体に似つかわない不敵な笑みを浮かべて言う。
「ダメ、と言ったのではないのか？　だから――」
やめたのではないか？　と、言外に匂わせて。
「……それは」
そういうつもりで言ったわけではない、と言おうとして口をつぐんだ。
それを言ってしまえば、ここに来てからの自分の言動が全てひっくり返ってしまうから。
そう、ここに……ここに？
チリと、何か大事なものに触れた気がする。
なんだろう……私は――何か忘れている？
心がざわめく。
なにを？
思い出せない。そもそも私は何故こんな事に――
「金色の闇よ」
再度ネメシスの言葉で思考が中断される。
だがそのタイミングに不審を抱いても、今の自分にはどうすることもできない。
「……」
黙って下から睨めつけると、
「そう怖い顔をするな。言っただろう？　私はアドバイスをするだけだと」
にこりと、これ以上ないくらいの笑みで返してきた。
ゾクリと、背筋に冷たいものが走り、そして確かに――わずかなものであったが――胸が高まるのを感じた。
その瞬間をネメシスは見逃さず、獲物を見つけたチェシャ猫のように目を細めた。だが、ヤミはそれに気づくことはなかった。
「……我慢することはないだろう。望むまま振る舞えばいい。思いだせ――」
ネメシスが囁く。
「お前が望むものを。お前が求めるものを。お前の中にあるものを」
紡がれる言葉がすうっと思考の中へ染み渡っていく。そして
どくんと、胸の奥が高鳴る。
ちりちりと、身体の奥から熱くなっていく。
「で、ですが、ああいうえっちぃ事は……キライです」
目を伏せて、言い訳のよう小さくつぶやく。
「ほう……ああいう、とは、どんな事かな？」
「それは――」
重ねて聞かれて口ごもってしまう。
脳裏には先程までの痴態が浮かんでいく。
無意識にもじりと、お尻を揺らしてしまう。
お腹が空いた時のような、飢餓感に近い何かを感じる。
「それなら次は、もっと大きく望めばいいだろう」
「何を言っているのですが……。何度も言いますが、私はああいうえっちぃ事は――」
「望んださ」

割り込まれた言葉にどきりとして息を呑む。
「……でなければどうして結城リトのモノなんかが出てきたというのだ？」
結城リトの――
ずくんと、身体の奥が胎動する。
「次はもっと激しく大きくと言うのはどうだ？　口で止めてと言っても止まらないほどの責めは？」
嘘くささを感じさせる笑みのまま、ネメシスが恐ろしいことを言ってくる。
しかし何より恐ろしいと感じたのは、
「そ、そんな事、私は――」
自分の中の何処かで、
「――私は望みません」
それを期待している自分がいることだった。
だから、今更でもそれを否定したのだが、ネメシスはその言葉を聞いて、
「……クックックッ、ハァーッハッハッハッ」
嘲笑った。
「そうか！　いや、そう言うだろうな！」
実に、実に彼女らしく。
そして――
「だがな金色の闇、先程も似たような答えで――結局どうなった？」
「……っ？！」
途端、金の髪の毛がざわめいて上に引っ張られた。
また……!?
身体が宙に浮く。白いスクール水着のネメシスが眼下でニヤニヤと笑っているのが見える。
そのネメシスの前――そして私の真下――でしゅるしゅると金の髪が合わさって形を変えていく。
結城リトのペニスを模していたモノに更に巻きつき、そのサイズを変えていく。
「そん、な……」
それが何なのか理解して言葉をなくす。
当たり前だ。
形こそさっきまでの結城リト変わりはないが、サイズは大きく違っていた。
そこには優に人の腕の太さを超えた、ありえないサイズのモノが立っていた。
「ハハ、これはなかなか立派だな」
「む、無理に決まっています！　そんな……そんなモノが入るわけがない！」
縛られている身体を捩って藻掻く。だが、背中で縛られた腕も、捉えられた太ももも、足首も、どの髪の毛もびくともせず、逃れられることはない。
わかっている。それでも、無駄だとわかっていても足掻かずにいられない。
次にどうなるかは理解してしまっているから。
足に髪の毛が巻き付き、腰を髪の手が掴んでいく。正座のようにたたまれた状態ですねと太ももを束ねた格好で左右ともに固定され、秘部をさらけるように開かれる。
真下にそびえる極太の模倣ペニスがだんだん近づいてきてくる。
近づくにつれその凶悪なサイズが理解出来てしまうほどに、きゅうっと、開かれた秘部の膣口が縮む。
アレが自分の中に収まるとはとても思えない。
「や、やめなさい！　こんなものが入るわけがありません!!」
だが、ヤミを縛る金の髪の毛は止まることなく、緩慢な動きでど

ちらこといえばゆっくりと、正確にヤミの身体を下ろしていく。
「ネメシスっ!!」
羞恥よりも焦りの色を濃くしたヤミが悲痛な声でネメシスを呼ぶ。
が――
「……言っただろう？　私は何もしていない、と。私はただ、観ているだけだ」
皮肉な笑みで、一歩も動かずネメシスは告げた。
「あ……ああ……」
絶望の呻きを漏れる。動けず、助けもない。
そして――くちり、と膣口に巨大なモノの先端が触れる。
「ひっ!?」
ビクッと腰が逃げるように跳ねた。
ほんの一瞬だけ、その脅威から逃れることはできたが、髪の毛は引き下ろす力を緩めることはなく――
「うあ……」
再度膣口と先端が口づけをする。そして、そのまま挿入しようと、さらに力が加わっていく。
「あ……か……」
腰を掴んでいた髪の手が、徐々に深く食い込んでいく。
膣口が引き伸ばされ、わずかにずつだが、模倣ペニスの先端をくわえていく。
しかしそれは、掛かる力と苦痛にはとても見合わない、本当に僅かなものでしかなかった。
ミチミチと、膣口が限界まで引き伸ばされていく音が確かに聞こえる。
「ぐっ……こ、こんな事を、して、何の、意味があると、言うのですか……っ!」
ギリギリと、引き伸ばされていく苦痛の中、ヤミが放った言葉に、ネメシスは涼しい顔で答える。
「さあな。それを決めるのは私ではない」
「そ、れは、どういう、こ、と……っ!」
脂汗を浮かべたヤミが息を吐ききった時、わずかに身体の緊張が解け、ぎち、と先端が一段深く食い込む。
「ぐぅっ!?」
そして次の瞬間――
「――――ああああああああぁぁァッッ!!　ぐぶぅっ!?」
ヤミが白い身体をのけぞらせて声を上げた。
その声が止まないうちにどぢゅっと、水気の多い肉がぶつかる鈍い音がして、ヤミの身体は縦に揺れた。
力の均衡が崩れ、挿入を果たした巨大な先端が、子宮ごとを押しつぶす勢いで一気に貫いたからだ。
ヤミのおへその下から膣口に渡ってボコリと、それとわかる膨らみが浮かび上がっている。
「か……、は……」
ヤミが白い喉をのけぞらせて、可愛らしい乳房を二つとも震わせる。肺の中に僅かに残っていた空気が絞り出されたが、衝撃のあまり呼吸もままならない。
膣内は髪の毛の一本も入らないほどにみっしりと、肉壁という肉壁を伸ばしきるように詰まっていた。
「ハハハ……入るものだな」
パチパチと少し拍手を鳴らしたネメシスが感心したように嘲笑い、そして、猫のような瞳を歪ませると続けて言った。
「どうした金色の闇。まだ始まったばかりじゃないか」
平素と変わらない口調の中に嗜虐の色を漂わすネメシスに、
「……む、無理……で、す……こ、れ以上、は……」

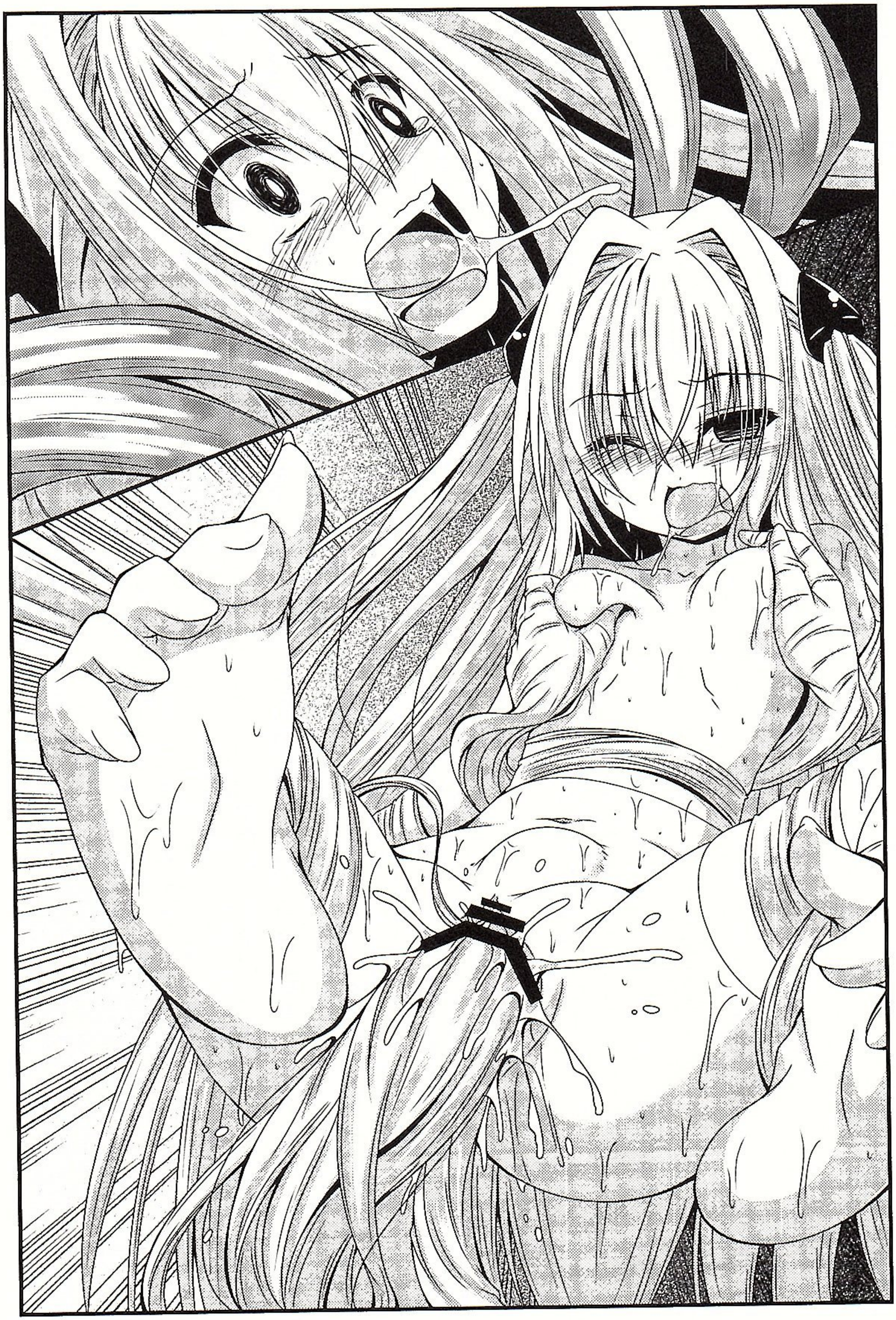


かろうじて途切れ途切れに答えた。
事実そう思っていた。身体に杭を打ち込まれたようで身動き一つ取れる気がしない。
なのに――
「なーに、すぐ慣れるさ。さっきもそうだったではないか」
ネメシスはニッコリと微笑む。
「ちが、う、さっきのは――あああああぁぁァァッッ!?」
肉壁を全て引き潰すような強烈なストロークで、膣道の入り口まで一息に下がっていき、
「――――ァ――ぐぅっ?!」
そしてまた子宮口へごじゅっと、勢い良くぶつかっていく。
最初はゆっくりと、だが少しずつペースを上げながらヤミの膣道を、その奥へと繰り返し突き上げていく。
そんなヤミをネメシスは再三の宣告通りに観察していた。
「フフフ……やはりな」
ヤミがどんな苦しげな声を出していても表情を変えなかったネメシスがその変化に気づくと、口元を歪めてつぶやいた。
「んぐぅっ、ん、ぅっ、あっ、ぅあ……」
ぐじゅっと、ヤミの開ききった膣口から長く太いモノが引き出される度に、濡れたサオ部分と、膣口から大量の白濁した粘液が滴り落ちていっている。
表情が苦しげなのは変わらないが、頬の赤みが増し、焦点の合わない瞳が潤んでいる。だが何よりも――
「あっ、ぐ、んんっ、は、あぁぁ……」
形の良い唇から漏れる声に艶と熱が時折混じってきていた。
こ、こんな、こんな事、って……っ!
子宮が押しつぶされる暴力的な深い挿入に、最初は息が詰まるだけであったのが、今はそれに混じって鈍く重い快感が背筋を駆け上ってくる。
膣道を巨大なカリが奥から止めどなくあふれる愛液をまとって前後すると、小さなヒダやつぶ状の突起も余すことなくごりごりと刺激して、ぴちぷちと小さな快感の泡をグラスの中の炭酸水のように全身に行き渡らせる。
ヤミの小さな身体の中で大きな快感と小さな快感が苦痛と共に満ちていく。
チカチカと明滅するそれらの信号は、あまりにも速く、多すぎて全てが綯い交ぜになって加熱してジリジリと、だが確実に思考を灼いていった。
ぎゅっと、膣外に出ないギリギリまで引き戻された先端が元の狭さに戻ろうとする淫らに濡れた粘膜の膣壁を削るように押しのけて進んでいく。
あ……く、くる……っ!
繰り返される抽送にただ反射的にそう思うと、動きを意識した身体が、次に来る衝撃と刺激に備える。
膣内がきゅっと構え、波濤のように押し寄せる快感にうなじの毛を逆立たせる。
どちゅっ、と子宮口に先端がぶつかり身体が揺れる。
「はぐぅ……っ!!」
重い衝撃と合わせて、じーんとした波紋のような快感が余韻を残しながら子宮から全身へと響き渡っていく。
それが潤みを起こし、潤みがさらなる快感を呼んで性感を昂ぶらせていく。
「ひぅっ……んぅっ……くぅ……っ」
ヌチャヌチャとした粘ついた水音が強くなるにつれ、ヤミの声も一緒に艶めかしい色彩を帯びていく。
ま、また……っ!!

髪を振り乱し、首筋から乳房に幾筋もの汗を流しながら、自分の絶頂の予兆を感じた。
「ほらな。言った通りだろう？」
嫌にハッキリと聞こえた、嘲笑うようなネメシスの言葉に屈辱を覚えながらも汗と愛液にまみれた悦楽から逃れることができない。
ぴく、ぴく、と内側の粘膜がさざめくように痙攣し始める。
終われば、もう、それで、終わる。だから、このまま――っ!!
目の前に迫った絶頂を本能のまま受け入れることに決めた時、ぐんと、最奥を突かれた瞬間――
「くっ!? わ、あ、あはぁあああぁぁあああぁぁあああぁ

激しい抽送が行われている白濁した愛液にまみれた膣口のすぐ下、綺麗にすぼまっていた菊の蕾を強い力で押し開けようとする感触。
「あ……っ?!」
ヤミがあまりのことに絶句した隙に金の髪の毛はずぶ、ずぶ、と不浄の花を犯していった。
侵入を果たした髪の毛は触手のようにうねうねと締め付けてくる腸壁を刺激しながら肉壁一枚越しの膣と同じく抽送を始める。
「うぐ、あ、ぐううぅ……っ!! ひぅっ!!」
反射的に力が入ってぎゅううっと、万力のように締め付けるが、腸液にまみれた髪の束はぬるりと、皺を伸ばされた蕾を出入りしていく。挿入よりも引き抜かれる時に起こる刺激に腰が抜けてしまうような錯覚を覚える。
その上、膣道側の極太抽送で圧迫された肉壁が、直腸側からも押されることによって、刺激の逃げ道が全くなくなった。
膣道が掘削された時、そのままでも強烈な快感だったが、直腸へ膨らんで逃していた分があった。それをお尻の中の髪の触手が挟み込んでプレスすると、全く逃げ場のない快感生成が行われていく。
それが休む間もなく続けられる。
ゴリゴリと掘り進む膣側に一拍遅れて、直腸側がローラーをかけるように膨らんできた腸壁を膣側へ押し返す。
「いいいいいいいいいいっ!!」
膣道と直腸の間の肉壁が引き攣るような痙攣を起こし、目の前でバチバチと火花が飛び交って意識を飛ばされそうになる
二穴同時の責めによる強烈な快感。熱病にかかったようぶるぶると震えてしまう。
「こわれ、る、こんな、つよ、すぎ、ます……」
真っ赤な顔の閉じきらない口から途切れ途切れに言葉がこぼれ落ちていく。

だがどれだけ願っても髪の毛達は責める動きを止めない。
どころか――
「ひうっ!?」
お尻を貫かれた時よりも奇妙な声が上がってしまう。
広がりきった膣口のすぐ上。
小指の先ほどの細めの髪の束が、ぷっくりと皮を被って膨らんでいる肉芽の下の小さな小さな排尿の穴を押し広げ今、まさに入らんとしているとこだった。
「む、無理に決まっています! そこはそんなところじゃ――うぐっ!?」
必死の声も虚しく、にゅるりと、肉真珠の下にある小孔へ潜り込んでいく。
「ひあっ!? ん、んんっ!!」
細い尿道をくねくねと遡っていく奇妙な感触に悲鳴とも嬌声ともつかない声を上げてしまう。
尿に排泄するだけの細い管に過ぎない、はずなのに責め立てられるともじもじと居ても立ってもいられない掻痒感にも似た、切ない快感が立ち上ってくる。
それに加えて他の二穴の熱いうねりが肉欲以外の全てを麻痺させて全身を悶えさせる。
「はぁっ、はぁっ、は……っ!?」
悩ましげに身体を揺らしていると、尿道側の肉壁もググっと膣道側へ押し戻されていく。
その分、膣道でぽっこりと細い筋状の出っ張りが浮き上がり、そこへ極太の抽送が突き込まれ――
「ひぐうううううううううぅぅぅぅぅぅっッ!!」
ヤミの口から絶叫が迸った。
右に左にコリコリと、伸ばされていく刺激、それに直腸側からの



ストロークも同時に伝わってくる。
通常では味わうことなどない膣壁を前後から挟み込んでの擦り上げで瞬時に達し、そのまま更に快感が上積みされていく。
粘液にまみれた巨大な模倣ペニスをヒダが抱きついて締めあげると、その裏側の尿道と直腸側からなめすみたいに圧迫され、蕩けていくような悦びに満たされていく。
ずぶ、じゅぷ、くちゅ、ぬちゅ、ごちゅ、と粘っこい水音が三つの穴から時折飛沫を上げて間断なく湧き起こる。
責め立てられたヤミの足元にはこぼれ落ちた滴で小さな水たまりができていた。
「ぐっ、ぐちゃぐちゃにっ、こん、なっ、ぜんぶ、とけてっ」
下半身がなくなっていくような錯覚を覚える。
「ふぁっ、やぅっ、ぁはっ、はっ、ぁあっ」
ヤミの喜悦の声が切迫したものへと変化していく。
汗まみれの身体の中で大きくうねる何かが浮かび上がってくる。
びくんびくんと、刺激のない所が存在しない膣道が脈打つように蠕動を始める。
あ……、
その自分の意志とはかけ離れた動きで予感をした直後――
「――――――

び散らせ、また絶頂を迎えた。
それでも終わらない。
息を切らせてぐったりと横たわっていると、すぐさま幾つもの髪の毛が触手となり身体を這いまわる。
まだ終わらない。
終わらない
終わらない
終わらない
「うぅんっ！　はあぁ……あっ、んん……っ!!　あ、ぁ、ぁぁ……」
そして何度目かの絶頂のあと、愛液の水たまりの中へ倒れこんだ。
顔の半分が饐えた愛液の中に沈み、口の中へドロドロと流れこんでくる。
けれど、立ち上がることはおろか、閉じようとした口すら震えて動かない。
不意に、顔に影がさした。
目だけ動かすと、こちらを見下ろしているネメシスと目が合った。
「……いつ……、おわるのですか……？」
水たまりに泡を立てながらなんとか言葉にすると、ネメシスがニヤリと笑って応えた。
「それを決めるのは金色の闇、お前だよ」
その言葉の意味はわからなかった。
考える気力はとうに無くなっていた。

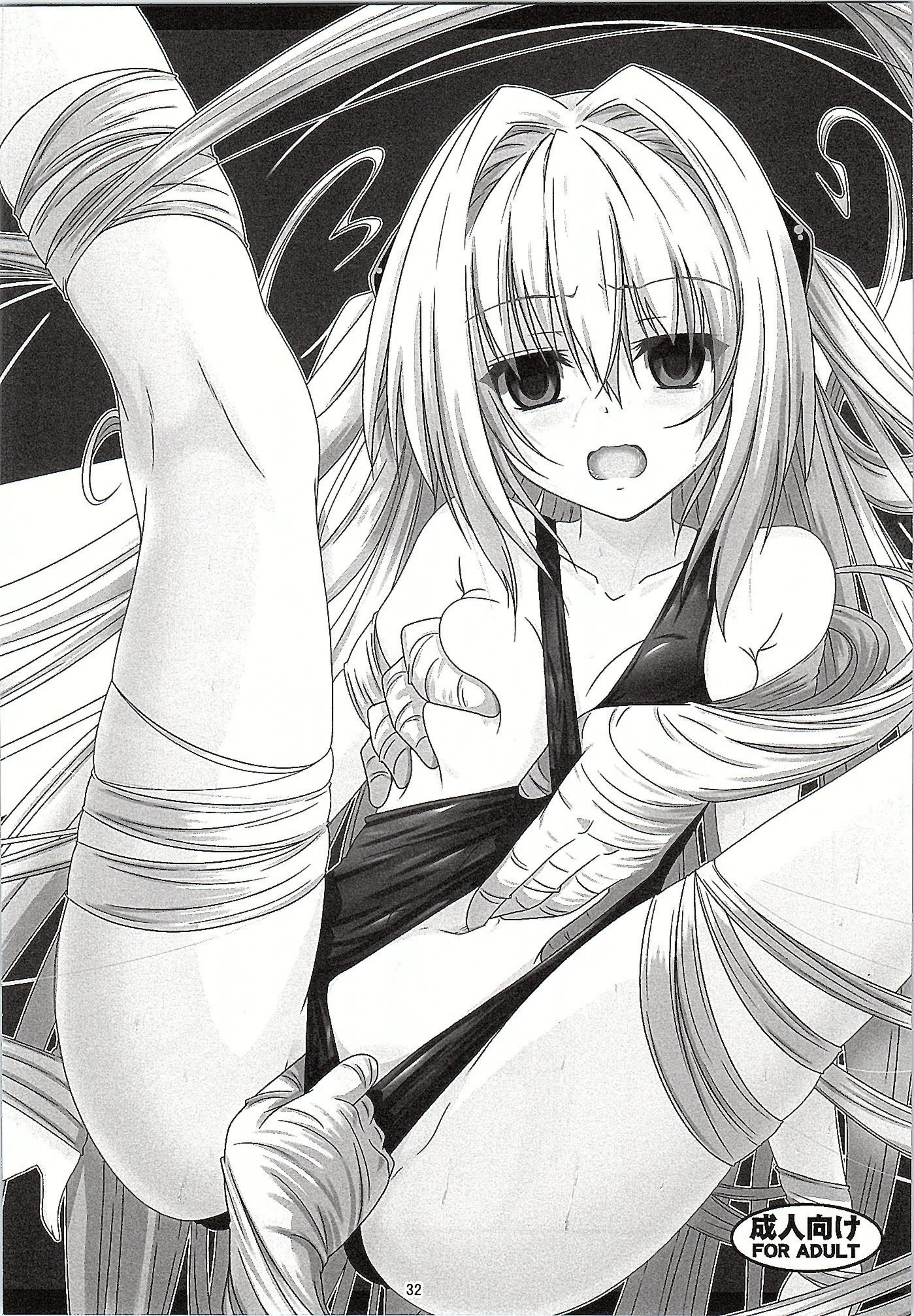
ネメシスは表情を変えることなく、自らの暴走した変身能力に呑まれていくヤミを観ていた。
ずいぶんと時間が過ぎ去った。
あれから金色の闇は何度も絶頂に追いやられた。
何度も何度も何度も

「ヤミちゃん！　心を落ち着けて!!」
ティアーユ・ルナティークの祈るような叫びがプールサイドに響いた。
さっきまで妹であるはずのメアと楽しげに肩を並べていた金色の闇こと、イヴの姿は自らが作り出した髪の毛を変身させた繭状の中へと飲み込まれていった。
何が起きているのか。今ほど自分の推測が外れることを願うことはなかった。
「フフフ……」
そんな状況を楽しそうに見守るネメシスが視界に入る。
彼女は一体どこまで知っているのだろう、ダークネスについて。
「やれやれ、やっとだな」
ネメシスがつぶやいた瞬間、辺り一面が真っ白に光った。
「!?」
反射的に目を閉じ、その爆発的な光が収まったあとに現れた者は、
「……なんてこと、なの」
サラサラの金の髪、すべすべな白い肌。
それは自分のよく知る彼女の特徴。
イヴと呼んで、本を読んであげていた時とまったく同じ。
だけど――その他はその頃とは、いえ、ついさっきまでと大きく違っていた。
もう一度出会えた時には自分を縛り覆い隠すようにしていた黒い服だった。
それが今は逆転してしまったかのように、肌の露出が激しい物に変わっていた。
バストくらいしかまともに隠れていないドレスに前後のTゾーンにしか布のないショーツ。
彼女らしくない扇情的な服装。
そして頭部に伸びる一対の角。
なによりも衝撃的だったのは手が攻撃的な爪に覆われたもの変わっていたことだった。
寝るまで握っていたあの暖かく柔らかい手は、一息で全てを切り裂けそうなほど尖って鈍く光っていた。

ダークネス

彩南町にきて平穏な光に包まれて穏やかに笑っていたイヴ――ヤミの姿はもはやなかった。
「なんてこと……っ！」
そうつぶやいて、ティアーユは呆然と立ち尽くすのみだった。
「ハハハ、待ちくたびれたぞ」
打ちひしがれるティアーユを尻目にネメシスがヤミ――ダークネスに歩み寄り、声をかける。
「やっと会えたな。どんな気分だ？　ダークネス」
ネメシスの問いかけにダークネスは自分の右手を見つめ、それから目を閉じて何かを思い出すように、舌先でほんの少し唇を舐めると、
「すっっっごく!!　えっちぃ気分」
頬を上気させて応えた。

Their weapons　了


成人向け
FOR ADULT

現在締め切りギリギリです
この原稿チキンレースは
いつまで続くんだろう・・・

とりあえずネメシス主役回はよ

三等兵

ナナの主役回早くこないかな

ふみひろ

■奥付■

発行　：夜の勉強会（ふみひろ）
　　玉よ砕けろ（三等兵）
発行日：2014/04/29
印刷　：くりえい社様

http://www5b.biglobe.ne.jp/~yoru/
yoru@mva.biglobe.ne.jp

無断転載・無断複製・18歳未満購読禁止

夜の勉強会
FOR ADULT ONLY